

〔曲 名〕 からたちの花のワルツ

〔曲 種〕

〔作曲者〕 山田耕筰

〔編 曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

北原白秋（1885－1942）の童謡「からたちの花」が発表されたのは大正13年7月号の「赤い鳥」であった。

白秋の生れた故郷は九州の柳川で生家は沖端というところにある油屋という古い海産物問屋。

ここから少し離れたところに鬼童小路という小路があり、片側は水郷につきものの堀割り、片側は昔の武家屋敷の並ぶ静かな道で、

白秋の家からこの小道に出るまでの露路にからたちの木の垣根があった。

白秋は小学校に入学してから明治37年の春上京する日まで「いつもいつも通った」という。

一方山田耕筰（1886－1965）が之に作曲したのは大正14年1月10日でセノオ楽譜として出版されたのは同年8月である。

耕筰は10才の頃東京の活版工場で働いていたが、食事の粗末なのに困りはて、近くの畑から胡瓜や大根をこっそりにとって空腹を満たしていたが、

ついには工場の周りに垣根としてめぐらしてあるからたちの実まで口に入れるようになったという。

食用にはならない筈なのが「初めはすっぱくて咽せかえるほどだったが、馴れるとなかなかよい。

ことに生の野菜と一緒に食べると、下手なサラダなどより数等いい味だった」そうである。

このように作詩者、作曲者共にからたちの木については忘れ難い感懐が秘められていたところに名曲の生まれる遠因があったと云えよう。

この初版楽譜の広告文面を見ると

「日本に出来た世界的の歌と云えば先づ指をこの歌に屈さねばならね。其の曲調の妙、そのなだらかなる。

作者の小年時代が眼前に表われてくる。

一度去っては亦とかえらぬ人生の春を思えかし」とある。

作者はまたそのはしがきに

まだあどけなかった私。未明から夜半ちかくまでも労働を敢えてしなければならなかった私。

私はまだ10才にも充たなかったその頃の私を想い起こします。

それは本当に健けな、またいぢらしい小さな私でありました。

私のいた工場は広い畑の中に建てられていました。

そしてその広い畑の一隅は、からたちで囲まれていました。

働きの僅かな暇を盗んで私はどれほどこのからたちの垣根へと走ったことでしょう。

そしてそこに初めて深い吐息をついたことでしょう。

あの白い花、青いとげ、黄金の果実…………

歌曲作曲の常套手段であった名節をその儘繰返すことをせず、

少しづつ変化させ而も単調に陥らぬように工夫されたメロディは穩かで澄んで白秋の童謡の美しさを見事に生かしている

当時山田耕筰は日本語の抑揚（アクセントに非ず）について厳しい考え方を実践していたので、恰も詩を読むように作られてあり、

原曲は三拍子と二拍子の混合体で書かれてあるが、その自然さは驚くべきものがある。

作曲者自身この曲が快心のものであったことはその後作者によってピアノ独奏曲、ヴァイオリン独奏曲チェロ独奏曲として別に作曲されていることでも解る。

このワルツも小編成の室内楽曲として作曲者が書いたものがあるのでそれに拠った。

1972年2月1日発行